

<セミナー1> トマス・デカーの作品とその時代性

コーディネーター：石橋 敬太郎（岩手県立大学教授）

メンバー：勝山 貴之（同志社大学教授）

佐野 隆弥（筑波大学教授）

檀浦 麻衣（学習院大学非常勤講師）

本多 まりえ（明治学院大学専任講師）

一般的にトマス・デカーと言えば、市民階級の生活を写実的にあるいは教訓的に描いた劇作家としてよく知られている。しかし、そればかりではなく、「時代性」という観点から見たとき、反スペイン感情に訴えた *Sir Thomas Wyatt* (1604) や *The Whore of Babylon* (1606) など、創作時のイングランドを取り巻く国際情勢を扱った作品も存在する。さらに、演劇作品以外にも、デカーは、ペスト流行時のロンドンの恐怖をつづった *The Wonderful Year* (1603) や、下層社会に巢食う悪や欺瞞を記述した *The Seven Deadly Sins of London* (1606) など、市井の状況を活写したパンフレットも多数執筆していた。

このように、デカーは、自身がおかれていた創作環境のなかで、時代と向き合い、その当時のポリティクスや市民生活の矛盾などを描いた作者とすることができる。そこで、本セミナーでは、*The Shoemaker's Holiday* (1599)、*Lust's Dominion* (1600)、*The Honest Whore*（第一部 1604、第二部 1605）や *The Roaring Girl* (1611) といった演劇作品のほか、パンフレットを取り上げて、デカーの作品がどのように時代を映し出し、どのようなメッセージを発信していたのかを明らかにすることを通して、デカーの同時代性の解明を試みた。各メンバーの要旨は次のとおりである。

本多まりえ

*The Shoemaker's Holiday*に見られる高級品への憧れと批判

Thomas Dekker の喜劇 *The Shoemaker's Holiday* (1599) は、Thomas Deloney の散文 *The Gentle Craft* の第1部 (1597) を材源とし、多々ある相違点の内、最も興味深いのは服装や装飾品の描写であり、Dekker の作品の方がより詳細である。*The Shoemaker's Holiday* はヘンリー6世の治世に設定されているが、劇中ではしばしばエリザベス朝時代の服装や装飾品が言及され、身分の象徴として印象的に描かれる。本発表では、*The Shoemaker's Holiday* に見られる高級品（贅沢な衣装や装飾品）に対する憧れと批判に着目し、当時の人々や Dekker の高級品に対する見解を考察した。Lacy、Sybil、Margery (Eyre の妻) は高級品に憧れる人物である。Lacy は常に絹製品を身に着け、Rose の侍女 Sybil は「麻のエプロン」と「イタリア製の手袋」などの褒美を目

当てに Rose の頼みを聞き、Margery は、Eyre が参事委員に就任する際、「ファージンゲール」や「フランス風頭巾」を用意し lady になろうとする。他方、Simon Eyre 及び靴職人の Ralph とその妻 Jane は高級品志向に対し批判的である。Eyre は自身の「金の鎖」や「緋色のガウン」に対する執着は棚に置き、高級品に執着する妻の「虚栄」を批判し、Ralph と Jane は拝金主義者の Hammon を非難する。Eyre の高級品に対する矛盾的態度は、Dekker 自身の態度の反映かもしれない。Dekker は、*The Seven Deadly Sins of London* など他の作品においても高級品を批判したが、他方では劇作家として、Eyre のように成功したかったのではないだろうか。

石橋敬太郎

『欲望の支配』におけるスペインとモロッコとの危険な関係

本劇が執筆・上演された時期と同じように、内政的に没落し始めたが、対外的には依然としてモロッコとの協力関係が求められているスペインという演劇空間のなかで、宮廷内のムーア人とスペイン人との闘争は内乱へと展開し、結果としてムーア人は敗走する。このような状況にあっても、フェスとバーバリーの王子で、現在はスペインの捕虜とされているエリエーザーは、フェリペ二世王妃ユージアを利用してスペインを支配しようとする。自らの野望のためには、策を弄して次々と味方を変える彼の手口のなかに、王国の安定拡大を目的として、トルコによるバーバリー支配を一掃するためにはスペインと手を組み、また新たな展望を見出せないフェリペ二世亡き後の内政に乗じて、スペイン征服のためはイングランドとの軍事的協力を求めたモロッコ国王アフマド・アル・マンスールの外交戦略を確認した。

しかし、本劇が執筆・上演された時期、イングランドにとって、スペインは依然として脅威であったことは確かである。これを例証するかのよう、劇中では王女イザベラが王子フェリペと彼女の婚約者ホーテンゾにムーア人の衣服を着て、顔を黒く塗り、エリエーザーを待ち伏せするように指示する場面が作り出される。そのなかで、エリエーザーは、フェリペたちが変装していることを知らず、正体を暴露したフェリペによって殺害される。しかしながら、エリエーザー殺害後も、変装したまま、幕を閉じるフェリペにはムーア人の残像が強く残る。この残像は、スペインとモロッコとの協力関係が決して断絶されないことを暗示していることを指摘した。

勝山貴之

トマス・デカーのパンフレットにおける都市と経済—大都市ロンドンの繁栄と墮落—

17世紀初頭、新国王を迎えたイングランドは、前政権末期の政情不安から解放され、

再び活気を取り戻しつつあった。好景気に沸く首都ロンドンには、地方から多くの人口が流れ込み、市はかつてない規模の人口増加を経験している。

しかしロンドンの繁栄は、英国経済を支える屋台骨でありながら、同時に人々のモラルを崩壊させる原因ともなった。経済の活況は人々に消費を促し、衣食住における贅沢を追求させたばかりか、いかさま賭博、詐欺、窃盗などの犯罪、そして売春といった様々な堕落へと誘うこととなったからである。

こうした世相を映し出すかのように、デカーはパンフレット『ロンドンの夜回り』や『ランプと蝋燭の灯』を出版し、様々な詐欺やペテンの手法、更には娼婦の生態を暴いてみせる。同時期に出版した『ロンドンの七つの大罪』の中で彼は、大都市に巣食う七つの大罪に言及し、そのひとつは人間の抱く「残酷さ」とあると言う。財産目当てで娘を金持ちに嫁がせようとする親たち、奉公人をまるで奴隷のように扱う主人たち、そして貧乏人を破産者牢獄に追いやる債権者たち―果たして人間はどこまで残酷になれるのか、デカーは述懐する。

ロンドンの繁栄の陰で、人々の心は拝金主義に染まり、果てしない快楽を求めるその魂は堕落して、挙げ句の果てには、心の奥深くに「残酷さ」という深い闇を抱えることとなった。大都市の急速な経済的発展は、人間性を歪めるばかりか、その魂の奥に果てしない暗黒の淵を生み出したのである。

デカーのパンフレットは、社会の底辺に蠢く人々の姿を活写しながら、こうした大都市ロンドンの繁栄の陰にある堕落を、そして人々の心の闇を、鋭く糾弾している。彼のパンフレットは、大都市の経済の隆盛の陰にある道徳的退廃の様子を克明に綴った、時代の証言に他ならない。

檀浦 麻衣

娼婦の矯正物語―『貞淑な娼婦』にみる価値観の揺らぎ―

本発表では、1604年と1605年に上演された Thomas Dekker の『貞淑な娼婦』二部作 (*The Honest Whore, Part I and II*) (第一部は Thomas Middleton との共作) の娼婦表象から、Dekker がどのように「娼婦の改心」というテーマをジェームズ朝の観客の好みに合うように演劇化したのかを考察した。

娼婦が改心するというモチーフは、マグダラのマリアにその系譜を見ることができるとは、本作は二部作を通して、娼婦が改心して「貞淑な」女性になるという、同時代の現実世界では珍しい状況を基調としたシティー・コメディである。第一部では、娼婦ベラフロンテが愛した男性のために罪深く汚れた生活を悔い改め、貞淑な女性になることを決意し、結婚するまでの過程が描かれ、第二部では、結婚したベラフロンテが、妻

となっても自分を娼婦扱いする夫や男性たちに貞淑であることを証明していく姿が描かれる。とりわけ興味深いのは、Dekker が第二部の最終幕の舞台を、浮浪者と犯罪者の矯正施設であったブライドウェル矯正院に設定し、ベラフロンテと収監されている娼婦たちを同時に舞台にのせた点である。

ブライドウェルで公爵によって娼婦の烙印から解放されるベラフロンテに対して、何度収監されても矯正されない娼婦たちのパレードは、ベラフロンテの再出発を寿ぐ大団円に影を落とす。しかし、この対照的な娼婦像を並べることにこそ、劇作家兼パンフレット作家としての Dekker の特性が現れているといえる。つまり、『ランプと蠟燭の灯』(Lanthorne and Candle-light 1608) にみられるように、パンフレット作家としてロンドンにはびこる娼婦の生態をつぶさに見つめた Dekker は、娼婦を貞淑に描くという矛盾したシミュレーションだけで劇を終わらせることはできなかったのである。そして、ブライドウェルの娼婦たちは、見世物として同時代の観客を満足させるとともに、「貞淑な娼婦」がフィクション上の産物でしかなかったことを今一度確認させるのである。

佐野隆弥

Thomas Dekker in 1611—*The Roaring Girl*における時代性と演劇的意識

標記タイトルのもとに報告を行った。例えば、ある劇作家の時代性を検証する際、同時代の言説と交渉するサブスタンシャルな主体を措定しておく必要がある。しかし、伝記的データや歴史的事実の乏しい Dekker の場合、その主体そのものが、Henslowe を始めとする同時代の演劇資料や、Dekker 自身の戯曲や散文から抽出された事象から構成されていて、言うなれば Dekker の主体とは同時代の演劇的ネットワーク空間の中で絡め取られ、構築されたものとなっている。本報告では、そのような前提に立脚した上で、演劇的存在である Dekker のキャリアにおける転回点であると考えられる、1611 年の主要作である *The Roaring Girl* に注目し、同戯曲を軸に、作品中で言及される戯曲や演劇的事象とのネットワークを解析した。*The Roaring Girl* が、同時代のロンドンを喚起する市民劇的な枠組みを使用する一方で、同時期に舞台にかけられた複数の戯曲に言及することを通して、劇作家は戯曲間の相互参照による意味空間を生成しようとしていると考えられる。

1606 年から 4・5 年ぶりに劇作へチャレンジした Dekker にとり、当時のロンドンの話題を独占していたであろう Mary Frith というトピカリティの領有が可能な状況下であり、Dekker がなすべき仕事は、いかにそれを劇のアクションに絡めるか、つまりプロット間の関係性の構築であった。結果から言えば、彼が行った選択は、相続財産移譲をめぐる親子間の世代間闘争という伝統的テーマと、gallants—商人の妻—その夫 3 者間

での cuckoldry という、性的資源をめぐる 17 世紀初頭に舞台で取り分け流通していた
所有権争いであり、それらを *Westward Ho* から始まる「方向もの」3 劇を再利用するこ
とで活性化したのである。このように、特定の時空間に存在する劇作家の演劇的意識を
検証することも、Dekker という主体の発信する一つの時代性の探究と言えるだろう。

